

# きりぎりす

太宰治

青空文庫



おわかれ致します。あなたは、嘘ばかりついていました。私にも、いけない所が、あるのかも知れませんが。けれども、私は、私のどこが、いけないのか、わからないの。私も、もう二十四です。このとしになつては、どこがいけないと言われても、私には、もう直す事が出来ません。いちど死んで、キリスト様のように復活でもしない事には、なおりません。自分から死ぬという事は、一ばんの罪悪のような氣も致しますから、私は、あなたとおわかれして私の正しいと思う生きかたで、しばらく生きて努めてみたいと思います。私には、あなたが、こわいのです。きつと、この世では、あなたの生きかたのほうが正しいのかも知れませんが。けれども、私には、それでは、とても生きて行けそうもありません。私が、あなたのところへ参りましてから、もう五年になります。十九の春に見合いをして、それからすぐに、私は、ほとんど身一つで、あなたのところへ参りました。今だから申しますが、父も、母も、この結婚には、ひどく反対だったのでございます。弟も、あれは、大学へはいったばかりの頃でありましたが、姉さん、大丈夫かい？ 等と、ませた事を言つて、不機嫌な様子を見せていました。あなたが、いやがるだろうと思ひましたから、きようまで黙つて居りましたが、あの頃、私には他に二つ、縁談がございました。もう記憶

も薄れている程なのですが、おひとりには、何でも、帝大の法科を出たばかりの、お坊ちやんで外交官志望とやら聞きました。お写真も拝見しました。楽天家らしい晴やかな顔をしていました。これは、池袋の大姉さんの御推薦でした。もうひとりのお方は、父の会社に勤めて居られる、三十歳ちかくの技師でした。五年も前の事ですから、記憶もはっきり致しません、なんでも、大きい家の総領で、人物も、しっかりしているとやら聞きました。父のお気に入らしく、父も母も、それは熱心に、支持していました。お写真は、拝見しなかつた、と思います。こんな事はどうでもいいのですが、また、あなたに、ふふんと笑われますと、つらいので、記憶しているだけの事を、はっきり申し上げました。いま、こんな事を申し上げるのは、決して、あなたへの厭いやがらせのつもりでも何でもございませぬ。それは、お信じ下さい。私は、困ります。他のいいところへお嫁に行けばよかつた等と、そんな不貞な、ばかな事は、みじんも考えて居りませんのですから。あなた以外の人は、私には考えられません。いつもの調子で、お笑いになると、私は困ってしまいます。私は本気で、申し上げているのです。おしまい迄までお聞き下さい。あの頃も、いまも、私は、あなた以外の人と結婚する気は、少しもありません。それは、はっきりしています。私は子供の時から、愚図々々が何より、きらいでした。あの頃、父に、母に、また池袋の大姉さ

んにも、いろいろ言われ、とにかく見合いだけでも等と、すすめられました。私にとつては、見合いもお祝しゅうげん言も同じものの様な気がしていましたから、かるがると返事は出来ませんでした。そんなおかたと結婚する気は、まるつきり無かったです。みんなの言う様に、そんな、申しぶんの無いお方かただったら、殊ことさら更に私でなくても、他に佳よいお嫁さんが、いくらでも見つかる事でしょうし、なんだか張り合いの無いことだと思っていました。この世界中に（などと言うと、あなたは、すぐお笑いになります）私でなければ、お嫁に行けないような人のところへ行きたいものだ、私はぼんやり考えて居りました。丁度その時に、あなたのほうからの、あのお話があったのでした。ずいぶん乱暴な話だったので、父も母も、はじめから不機嫌でした。だって、あの骨董屋こつとうやの但馬たじまさんが、父の会社へ画を売りに来て、れいのお喋りしゃべを、さんざんした揚句の果に、この画の作者は、いまにきつと、ものになります。どうです、お嬢さんを等と不謹慎な冗談を言い出して、父は、いい加減に聞き流し、とにかく画だけは買つて会社の応接室の壁に掛けて置いたら、二、三日して、また但馬さんがやつて来て、こんどは本気に申し込んだというじやありませんか。乱暴だわ。お使者の但馬さんも但馬さんなら、その但馬さんにそんな事を頼む男も男だ、と父も母も呆あきれていました。でも、あとで、あなたにお伺いして、それは、あなたの

全然ご存じなかった事で、すべては但馬さんの忠義な一存からだったという事が、わかりました。但馬さんには、ずいぶんお世話になりました。いまの、あなたの御出世も、但馬さんのお蔭よ。本当に、あなたには、商売を離れて尽して下さった。あなたを見込んだというわけね。これからも、但馬さんを忘れては、いけません。あの時、私は但馬さんの無鉄砲な申し込みの話を聞いて、少し驚きながらも、ふっと、あなたにお逢いしてみたくなりました。なんだか、とても嬉<sup>うれ</sup>しかったの。私は、或<sup>あ</sup>る日こっそり父の会社に、あなたの画を見に行きました。その時のことを、あなたにお話し申したかしら。私は父に用事のあの振りをして応接室にはいり、ひとりで、つくづくあなたの画を見ました。あの日は、とても寒かった。火の気の無い、広い応接室の隅<sup>すみ</sup>に、ぶるぶる震えながら立って、あなたの画を見ていました。あれは、小さい庭と、日当りのいい縁側の画でした。縁側には、誰も坐<sup>すわ</sup>っていないで、白い座蒲団<sup>ざぶとん</sup>だけが一つ、置かれていました。青と黄色と、白だけの画でした。見ているうちに、私は、もつとひどく、立って居られないくらいに震えて来ました。この画は、私でなければ、わからないのだと思いました。真面目<sup>まじめ</sup>に申し上げているのですから、お笑いになつては、いけません。私は、あの画を見てから、二、三日、夜も昼も、からだが震えてなりませんでした。どうしても、あなたのそこへ、お嫁に行かなければ、

と思ひました。蓮葉はすはな事で、からだはすはが燃えるように恥はずかしく思ひましたが、私は母にお願いしました。母は、とても、いやな顔はをしました。私はけれども、それは覺悟はしていた事はでしたので、あきらめずに、こんどは直接、但馬さんに御返事はいたしました。但馬さんは大声で、えらい！とおつしやつて立ち上り、椅子はに躓つまずいて転びましたが、あの時は、私も但馬さんも、ちつとも笑はいませんでした。それからはの事は、あなたも、よく御承知はの筈はずでござはいます。私の家では、あなたの評判はは、日が経たつにつれて、いよいよ悪くなる一方はでした。あなたが、瀬戸内海の故郷はから、親にも無断で東京へ飛び出して来て、御両親は勿論もちろん、親戚の人ことごとくが、あなたに愛想はづかしをしてはいる事、お酒を飲む事、展覽会はに、いちども出品はしてはいない事、左翼らしいという事、美術学校を卒業はしているかどうか怪しいという事、その他はたくさん、どこで調べて来るのか、父も母も、さまざまの事はを私に言い聞かせて叱しかりました。けれども、但馬さんの熱心はなとりなしで、どうやら見合はいまでには漕こぎつけました。千疋屋せんびきやの二階はに、私は母と一緒にはまいりました。あなたは、私の思はつていたとおりの、おかたでした。ワイシャツの袖口そでぐちが清潔はなのに、感心はいたしました。私が、紅茶の皿はを持ち上げた時、意地悪はくからだはが震えて、スプーンが皿の上でかちやかちや鳴なつて、ひどく困こりました。家へ帰かつてから、母は、あなたの悪口はを、

一そう強く言っていました。あなたが煙草たばこばかり吸って、母には、ろくに話をして上げなかつたのが、何より、いけなかつたようでした。人相が悪い、という事も、しきりに言っていました。見込みがないというのです。けれども私は、あなたのところへ行く事に、きめていました。ひとつき、すねて、とうとう私が勝ちました。但馬さんとも相談して、私は、ほとんど身一つで、あなたのところへ参りました。淀橋よどばしのアパートで暮した二箇年かほど、私にとって楽しい月日は、ありませんでした。毎日毎日、あすの計画で胸が一ぱいでした。あなたは、展覧会にも、大家たいかの名前にも、てんで無関心で、勝手な画ばかり描いていました。貧乏になればなるほど、私はぞくぞく、へんに嬉しくて、質屋にも、古本屋にも、遠い思い出の故郷のような懐なつかしさを感じました。お金が本当に何も無くなった時には、自分のありつたけの力を、ためす事が出来て、とても張り合いがありました。だって、お金の無い時の食事ほど楽しくて、おいしいのですもの。つぎつぎに私は、いいお料理を、発明したでしょう？ いまは、だめ。なんでも欲しいものを買えると思えば、何の空想も湧わいて来ません。市場へ出掛けてみても私は、虚無です。よその叔母さんたちの買うものを、私も同じ様に買って帰るだけです。あなたが急にお偉くなって、あの淀橋のアパートを引き上げ、この三鷹町みたかの家に住むようになってからは、楽しい事が、なんにもなくなつ



てしまいました。私の、腕の振りどころが無くなりました。あなたは、急にお口もお上手になって、私を一そう大事にして下さいましたが、私は自身が何だか飼ひ猫のように思われて、いつも困つて居りました。私は、あなたを、この世で立身なさるおかたとは思わなかつたのです。死ぬまで貧乏で、わがまま勝手な画ばかり描いて、世の中の人みんなに嘲ちょう笑しょうせられて、けれども平気で誰にも頭を下げず、たまには好きなお酒を飲んで一生、俗世間に汚されずに過して行くお方だとばかり思つて居りました。私は、ばかだったのでしようか。でも、ひとりくらは、この世に、そんな美しい人がいる筈だ、と私は、あの頃も、いまもお信じて居ります。その人の額ひたいの月桂樹げっけいじゆの冠は、他の誰にも見えないので、きつと馬鹿扱いを受けるでしょうし、誰もお嫁に行つてあげてお世話しようともしないでしようから、私が行つて一生お仕えしようと思つていました。私は、あなたこそ、その天使だと思つていました。私でなければ、わからないのだと思つていました。それが、まあ、どうでしょう。急に、何だか、お偉くなつてしまつて。私は、どういうわけだか、恥ちずかしくてたまりません。

私は、あなたの御出世を憎んでいるのではございません。あなたの、不思議なほどに哀しい画が、日一日と多くの人に愛されているのを知つて、私は神様に毎夜お礼を言いまし

た。泣くほど嬉しく思いました。あなたが淀橋のアパートで二年間、気のむくままに、好きなアパートの裏庭を描いたり、深夜の新宿の街を描いて、お金がまるつきり無くなつた頃には但馬さんが来て、二、三枚の画と交換に十分のお金を置いて行くのでしたが、あの頃は、あなたは、但馬さんに画を持って行かれる事が、ひどく淋しい御様子で、お金の事などに、てんで無関心でありました。但馬さんは、来る度毎に私を、こっそり廊下へ呼び出して、どうぞ、よろしく、ときまつたように真面目に言ってお辞儀をし、白い角封筒を、私の帯の間につつ込んで下さるのでした。あなたは、いつでも知らん顔をして居りますし、私だって、すぐその角封筒の中味を調べるような卑しい事は致しませんでした。無ければ無いで、やって行こうと思つていたのですもの。いくらいただいた等、あなたに報告した事も、ありません。あなたが汚したくなかつたのです。本当に、私は一度だって、あなたに、お金が欲しいの、有名になつて下さいの、とお願ひした事はございませんでした。あなたのような、口下手な、乱暴なおかたは、（ごめんなさい）お金持にもならないし、有名になど決してなれるものでないと私は、思つていました。けれども、見せかけだったのね。どうして、どうして。

但馬さんが個展の相談を持つて来られた時から、あなたは、何だか、おしやれになりま

した。まず、齒医者へ通いはじめました。あなたは虫歯が多くて、お笑いになると、まるでおじいさんのように見えましたが、けれどもあなたは、ちつとも気になさらず、私が、齒医者へおいでになるようにおすすめしても、いいよ、歯がみんな無くなりやあ総入歯にするんだ、金歯を光らせて女の子に好かれたって仕様が無い、等と冗談ばかりおっしゃって、一向に歯のお手入れをなさらなかったのに、どういう風の吹き廻しか、お仕事の合間、合間に、ちよいちよいと出かけて行つては、一本二本と、金歯を光らせてお帰りになるようになりました。こら、笑つてみる、と私が言つたら、あなたは、鬚ひげもじやの顔を赤くして、但馬の奴やつが、うるさく言うんだ、と珍しく気弱い口調で弁解なさいました。個展は、私が淀橋へまいりましたから二年目の秋に、ひらかれました。私は、うれしゆうございしました。あなたの画が、一人でも多くの人に愛されるのに、なんで、うれしくない事がありました。私には、先見の明めいがあつたのですものね。でも、新聞でもあんなに、ひどくほめられるし、出品の画が、全部売り切れたそうですし、有名な大家たいかからも手紙が来ますし、あんまり、よすぎて、私は恐しい気が致しました。会場へ、見に来いと、あなたにも、但馬さんにも、あれほど強く言われましたけれど、私は、全身震えながら、お部屋で編物ばかりしていました。あなたの、あの画が、二十枚も、三十枚も、ずらりと並んで、それを

大勢の人たちが、眺<sup>なが</sup>めている有様を、想像してさえ、私は泣きそうになってしまいます。こんなに、いい事が、こんな早く来すぎては、きつと、何か悪い事が起るのだとさえ、考えました。私は、毎夜、神様に、お詫<sup>わ</sup>びを申しました。どうか、もう、幸福は、これだけでたくさんでございますから、これから後、あの人が病気などなさらぬよう、悪い事の起らぬよう、お守り下さい、と念じていました。あなたは毎夜、但馬さんに誘<sup>いわ</sup>われて、ほうぼうの大家<sup>たいか</sup>のところへ挨拶<sup>あいさつ</sup>に参ります。翌朝お帰りの事も、ございましたが、私は別に何とも思っていないのに、あなたは、それは精<sup>くわ</sup>しく前夜の事を私に語って下さって、何先生は、どうだとか、あれは愚物<sup>ぐぶつ</sup>だとか、無口なあなたらしくもなく、ずいぶんつまらぬお喋<sup>しゃべ</sup>りをはじめます。私は、それまで二年、あなたと暮して、あなたが人の陰口<sup>かげぐち</sup>をたいたのを伺った事が一度もありませんでした。何先生は、どうだって、あなたは唯<sup>ゆい</sup>我<sup>が</sup>独<sup>どく</sup>尊<sup>そん</sup>のお態度で、てんで無関心の御様子だったではありませんか。それに、そんなお喋<sup>しゃべ</sup>りをして、前夜は、あなたに何のうしろ暗いところも無かったという事を、私に納得させようと、お努めになつて居られるようなのですが、そんな気弱な遠廻<sup>とんまわ</sup>しの弁解<sup>べんげ</sup>をなさらずとも、私だつて、まさか、これまで何も知らずに育つて来たわけでもございませぬし、はつきりおっしゃって下さったほうが、一日くらい苦しくても、あとは私はかえって楽になります。

所詮<sup>しよせん</sup>は生涯の、女房なのですから。私は、そのほうの事では、男の人を、あまり信用して居りませんし、また、滅茶に疑つても居りません。そのほうの事でしたら、私は、ちつとも心配して居りませぬし、また、笑つて忪<sup>こら</sup>える事も出来るのですけれど、他に、もつと、つらい事がございます。

私たちは、急にお金持になりました。あなたも、ひどくおいそがしくなりました。二科会から迎えられて、会員になりました。そうして、あなたは、アパートの小さい部屋を、恥ずかしがるようになりました。但馬さんもしきりに引越すようにすすめて、こんなアパートに居るのでは、世の中の信用も如何<sup>いか</sup>と思われるし、だいいち画の値段が、いつまでも上りません、一つ奮発して大きい家を、お借りなさい、と、いやな秘策をさすけ、あなたまで、そりやあそうだ、こんなアパートに居ると、人が馬鹿にしやがる、等と下品なことを、意気込んで言うので、私は何だか、ぎよつとして、ひどく淋しくなりました。但馬さんは自転車に乗つてほうぼう走り廻り、この三鷹町の家を見つけて下さいました。としの暮に私たちは、ほんのわずかなお道具を持って、この、いやに大きいお家へ引越して参りました。あなたは、私の知らぬ間にデパートへ行つて何やらかやら立派なお道具を、本当にたくさん買い込んで、その荷物が、次々とデパートから配達されて来るので、私は胸が

つまつて、それから悲しくなりました。これではまるで、そこらにたくさんある当り前の成なりきん金と少しも違っていないのですもの。けれども私は、あなたに悪くて、努めて嬉しうに、はしゃいでいました。いつの間にか私は、あの、いやな「奥様」みたいな形になっていました。あなたは、女中を置こうとさえ言い出しましたけれど、それだけは、私は、何としても、いやで、反対いたしました。私には、人を、使うことが出来ません。引越して来て、すぐにあなたは、年賀状を、移転通知を兼ねて三百枚も刷らせました。三百枚。いつのまに、そんなにお知合いが出来たのでしょうか。私には、あなたが、たいへんな危い綱渡りをはじめているような気がして、恐しくなりませんでした。いまに、きつと、悪い事が起る。あなたは、そんな俗な交際などなさつて、それで成功なさるようなお方では、ありません。そう思つて、私は、ただはらはらして、不安な一日一日を送つていたのでございりますが、あなたは躓つまずかぬばかりか、次々と、いい事ばかりが起るのでした。私が間違つているのでしょうか。私の母も、ちよいちよい、この家へ訪ねて来るようになって、その度毎に、私の着物やら貯金帳やらを持って来て下さつて、とても機嫌きげんがいいのです。父も、会社の応接間の画を、はじめは、いやがつて会社の物置にしまわせたのださうですが、こんどは、それを家へ持つて来て、額縁も、いいのに変えて、父の書齋に掛けてい

るのだそうです。池袋の大姉さんも、しつかりおやり等と、お手紙を下さるようになりました。お客様も、ずいぶん多くなりました。応接間が、お客様で一ぱいになる事もありました。そんな時、あなたの陽気な笑い声が、お台所まで聞えて来ました。あなたは、ほんとに、お喋りになりました。以前あなたは、あんなに無口だったので、私は、ああ、このおかたは、何もかもわかつていながら、何でも皆つまらないから、こんなに、いつでも黙って居られるのだ、とばかり思い込んで居りましたが、それでもないらしいのね。あなたは、お客様の前で、とてもつまらない事を、おっしゃって居られます。前の日に、お客様から伺ったばかりの画の論を、そっくりそのまま御自分の意見のように鹿しかつめ爪らしく述べたいたり、また、私が小説を読んで感じた事をあなたに、ちよつと申し上げると、あなたはその翌日、すましてお客様に、モオパスサンだって、やはり信仰には、おびえていたんだね、なんて私の愚論をそのままお聞かせしているものですから、私はお茶を持って応接間にはいりかけて、あまり恥ずかしくて立ちすくんでしまう事もありました。あなたは、以前は、なんにも知らなかったのね。ごめんさい。私だって、なんにも、ものを知りませんけれども、自分の言葉だけは、持っているつもりなのに、あなたは、全然、無口か、でもない、人の言った事ばかりを口真くちまね似しているだけなんですもの。それなのに、あな

たは不思議に成功なさいました。そのとしの二科の画は、新聞社から賞さえもらつて、その新聞には、何だか恥ずかしくて言えないような最大級の讃辞が並べられて居りました。孤高、清貧、思索、憂愁、祈り、シヤヴアンヌ、その他いろいろございました。あなたは、あとでお客様とその新聞の記事に就いてお話なされ、割合、當つていたようだね、等と平気でおっしゃつて居りましたが、まあ何という事を、おっしゃるのでしょうか。私たちは清貧ではございません。貯金帳を、ごらんにいれましようか。あなたは、この家に引越して来てからは、まるで人が變つたように、お金の事を口になさるようになりました。お客様に画をたのまれると、あなたは、必ずお値段の事を悪びれもせず、言い出します。はつきりさせて置いたほうが、後でいざこざが起らなくて、お互に気持がいいからね、などと、あなたはおお客様におっしゃつて居られますが、私はそれを小耳にはさんで、やはり、いやな気が致しました。なんでそんなに、お金にこだわるのでしょうか。いい画さえ描いて居れば、暮しのほうは、自然に、どうにかなつて行くものと私には思われます。いいお仕事をなさつて、そうして、誰にも知られず、貧乏で、つましく暮して行く事ほど、楽しいものはありません。私は、お金も何も欲しくありません。心の中で、遠い大きいプライドを持つて、こつそり生きていたいと思います。あなたは私の、財布の中まで、



おしらべになるようになりました。お金がはいると、あなたは、あなたの大きい財布と、それから、私の小さい財布とに、お金をわけて、おいれになります。あなたの財布には、大きいお紙幣さつを五枚ばかり、私の財布には、大きいお紙幣一枚を、四つに畳んでお容れになります。あとのお金は、郵便局と銀行へ、おあづけになります。私は、いつでも、それを、ただ傍で眺めています。いつか私が、貯金帳をいれてある書棚しよたなの引き出しの鍵かぎを、かけるのを忘れていたら、あなたは、それを見つけて、困るね、と、しんから不機嫌に、私におこごとを言うので、私は、げっそり致しました。画廊へ、お金を受取りにおいでになれば、三日目くらいにお帰りになります。そんな時でも、深夜、酔ってながらも玄関の戸をあけて、おはいりになるや否や、おい、三百円あまして来たぞ、調べて見なさい、等と悲しい事を、おっしゃいます。あなたのお金ですもの、いくらお使いになつたつて平気ではないでしょうか。たまには気晴しに、うんとお金を使いたくなる事もあるだろうと思います。みんな使おうと、私が、がっかりするとも思つて居られるのでしょうか。私だつて、お金の有難さは存じていますが、でも、その事ばかり考えて生きているのでは、ございませぬ。三百円だけ残して、そうして得意顔でお帰りになるあなたのお気持が、私には淋しくてなりません。私は、ちつともお金を欲しく思つていません。何を買いたい、何

を食べたい、何を観たいとも思いません。家の道具も、たいてい廃物利用で間に合わせて居りますし、着物だつて染め直し、縫い直しますから一枚も買わずにすみませす。どうにでも、私は、やつて行きます。手拭掛てぬぐいかけ一つだつて、私は新しく買うのは、いやです。むだな事ですもの。あなたは時々、私を市内へ連れ出して、高い支那料理などを、ごちそうして下さいましたが、私にはちつともおいしいとは思われませんでした。何だか落ちつかなくて、おつかなびつくりの氣持で、本もつたい当に、勿もつたい体なくて、むだな事だと思ひました。三百円よりも、支那料理よりも、私には、あなたが、この家のお庭に、へちまの棚を作つて下さつたほうが、どんなに嬉しいかわかりませす。八畳間の縁側には、あんなに西日が強く当るのですから、へちまの棚をお作りになると、きつと工合がいいと思ひます。あなたは、私があればお願いしても、植木屋を呼んだらいいとか、おつしやつて、ご自分で作つては、くさいませす。植木屋を呼ぶなんて、そんなお金持の真似まねは、私は、いやです。あなたに、作つていただきたいのに、あなたは、よし、よし、来年は、等とおつしやるばかりで、とうとう今日まで、作つては下さいませす。あなたは、御自分の事では、ひどく、むだ使いをなさるのに、人の事には、いつでも知らん顔をなさつて居ります。いつでしたかしら、お友達の雨宮さんが、奥さんの御病氣で困つて、御相談にいらした時、あ

なたは、わざわざ私を応接間にお呼びになって、家にいま、お金があるかい？ と真面目まじめな顔をして、お聞きになるので、私は、可笑おかしいやら、ばからしいやらで、困ってしまいました。私が顔を赤くして、もじもじしていると、隠すなよ、そこらを搔かき廻したら、二十円くらいは出て来るだろう、と私に、からかうようにおっしゃるので、私は、びっくりしてしまいました。たった二十円。私は、あなたの顔を見直しました。あなたは、私の視線を、片手で、払いのけるようにして、いいから僕に貸しておくれ、けちけちするなよ、とおっしゃって、それから雨宮さんのほうに向って、お互、こんな時には、貧乏は、つらいね、と笑っておっしゃるのです。私は、呆あきれて、何も申し上げたくなくなりました。あなたは清貧でも何でも、ありません。憂愁だなんて、いまの、あなたはどこに、そんな美しい影があるのでしょうか。あなたは、その反対の、わがままな楽道家です。毎朝、洗面所で、おいとこそうだよ、なんて大声で歌って居られるでは、ありませんか。私は御近所に恥ずかしくてなりません。祈り、シャヴァンヌ、もつたいないと思います。孤高だなんて、あなたは、お取巻きのかたのお追ついで従ついでの中でだけ生きているのにお気が附かれないのですか。あなたは、家へおいでになるお客様たちに先生と呼ばれて、誰かれの画を、片端からやつつけて、いかにも自分と同じ道を歩むものは誰も無いような事をおっしゃいま

すが、もし本当にそうお思いなら、そんなに矢鱈やたらに、ひとの悪口をおつしやつてお客様たちの同意を得る事など、要らないと思えます。あなたは、お客様たちから、その場かぎりの御賛成でも得たいのです。なんで孤高な事がありましょう。そんなに来る人、来る人に感服させなくても、いいじゃありませんか。あなたは、とても嘘うそつきです。昨年、二科から脱退して、新浪漫派とやらしい団体を、お作りになる時だつて、私は、ひとりで、どんなに惨めみじな思いをしていた事でしょう。だつて、あなたは、蔭であんなに笑つて、ばかにしていたおかた達ばかりを集めて、あの団体を、お作りになつたのでございますもの。あなたには、まるで御定見が、ございませぬ。この世では、やはり、あなたのような生きかたが、正しいのでしょうか。葛西かさいさんがいらした時には、お二人で、雨宮さんの悪口をおつしやつて、憤慨ちやうしやうしたり、嘲笑ちやうしやうしたりして居られますし、雨宮さんがおいでの時は、雨宮さんに、とても優しくしてあげて、やつぱり友人は君だけだ等と、嘘とは、とても思えないほど感激的におつしやつて、そうして、こんどは葛西さんの御態度に就いて非難を、おはじめになるのです。世の中の成功者とは、みんな、あなたのような事をして暮しているものなのでしょうか。よくそれで、躓つまずかずに生きて行けるものだど、私は、そら恐しくも、不思議にも思えます。きつと、悪い事が起る。起ればいい。あなたのお為にも、神の

実証のためにも、何か一つ悪い事が起るように、私の胸のどこかで祈っているほどになつてしまいました。けれども、悪い事は起りませんでした。一つも起りません。相変らず、いい事ばかりが続きます。あなたの団体の、第一回の展覧会は、非常な評判のようでした。ごいました。あなたの、菊の花の絵は、いよいよ心境が澄み、高潔な愛情が馥郁ふくいくと匂におつているとか、お客様たちから、お噂うわさを承りました。どうして、そういう事になるのでしょうか。私は、不思議でたまりません。ことしのお正月には、あなたは、あなたの画の最も熱心な支持者だという、あの有名な、岡井先生のところへ、御年始に、はじめて私を連れてまいりました。先生は、あんなに有名な大家たいかなのに、それでも、私たちの家よりも、小さいくらいのお家に住まれて居られました。あれで、本当だと思います。でつぷり太つて居られて、てこでも動かない感じで、あぐらをかいて、そうして眼鏡越しに、じろりと私を見る、あの大きい眼も、本当に孤高なお方の眼でございました。私は、あなたの画を、はじめて父の会社の寒い応接室で見た時と同じ様に、こまかく、からだを震えてなりません。先生は、実に単純な事ばかり、ちつともこだわらずに、おっしゃいます。私を見て、おう、いい奥さんだ、お武家ぶけそだちらしいぞ、と冗談をおっしゃったら、あなたは真ま面目じめに、はあ、これの母が士族でして、などといかにも誇らしげに申しますので、私は冷

汗を流しました。母が、なんで士族なのですか。父も、母も、ねっからの平民でござい  
ます。そのうちに、あなたは、人におだてられて、これの母は華族でして、等とおっしや  
るようになるのではないでしょうか。それ恐い事でございます。先生ほのおかたでも、  
あなたの全部のいんちきを見破る事が出来ないとは、不思議であります。世の中は、みん  
な、そんなものなのでしょう。先生は、あなたの此の頃のお仕事を、さぞ苦しいだろう  
と言つて、しきりにいたわ勞つておいでになりましたが、私は、あなたの毎朝の、おいとこそう  
だよ、という歌を歌つておいでになるお姿を思い出し、何がなんだかわか判らなくなり、しき  
りに可笑しく、噴き出しそうにさえなりました。先生のお家から出て、一町も歩かないう  
ちに、あなたは砂利を蹴けつて、ちえっ！ 女には、甘くていやがら、とおっしやいました  
ので、私はびつくり致いたしました。あなたは、卑劣です。たつたいま迄、あの御立派な先生  
の前で、ペコペコしていらした癖に、もうすぐ、そんな陰口をたたくなんて、あなたは、  
氣違ひです。あの時から、私は、あなたと、おわかれしようと思ひました。この上、こら忝え  
て居る事が出来ませんでした。あなたは、きつと、間違つて居ります。わざわいが、起つ  
てくれたらいい、と思ひます。けれども、やつぱり、悪い事は起りませんでした。あなた  
は但馬さんの、昔の御恩をさえ忘れた様子で、但馬のばかが、また来やがった、等とお友

達におつしやつて、但馬さんも、それを、いつのまにか、ご存じになったようで、ご自分から、但馬のぼかが、また来ましたよ、なんて言つて笑いながら、のこのこ勝手口から、おあがりになります。もう、あなた達の事は、私には、さっぱり判りません。人間の誇りが、一体、どこへ行つたのでしょうか。おわかれ致します。あなた達みんな、ぐるになつて、私をからかつて居られるような気さえ致します。先日あなたは、新浪漫派の時局的意義とやらに就いて、ラジオ放送をなさいました。私が茶の間で夕刊を読んでいたら、不意にあなたのお名前が放送せられ、つづいてあなたのお声が。私には、他人の声のような気が致しました。なんとという不潔に濁つた声でしょう。いやな、お人だと思いました。はつきり、あなたという男を、遠くから批判出来ました。あなたは、ただのお人です。これからも、ずんずん、うまく、出世をなさるでしょう。くだらない。「私の、こんにち在るは」というお言葉を聞いて、私は、スイッチを切りました。一体、何になつたお積りなのでしょう。恥じて下さい。「こんにち在るは」なんて恐しい無智な言葉は、二度と、ふたたび、おつしやらないで下さい。ああ、あなたは早く躓いたら、いいのだ。私は、あの夜、早く休みました。電気を消して、ひとりで仰向に寝ていると、背筋の下で、こおろぎが懸命に鳴いていました。縁の下で鳴いているのですけれど、それが、ちょうど私の背筋の真下あたり

で鳴いているので、なんだか私の背骨の中で小さいきりぎりすが鳴いているような気がするのです。この小さい、幽かすかな声を一生忘れずに、背骨にしまつて生きて行こうと思いましたが、この世では、きつと、あなたが正しくて、私こそ間違っているのだらうとも思いますが、私には、どこが、どんなに間違っているのか、どうしても、わかりません。



# 青空文庫情報

底本：「きりぎりす」新潮文庫、新潮社

1974（昭和49）年9月30日発行

1988（昭和63）年3月15日29刷改版

2001（平成13）年5月5日53刷

初出：「新潮」

1940（昭和15）年11月号

入力：土屋隆

校正：鈴木厚司

2005年12月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# きりぎりす

太宰治

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>